

ルドベキア タイガーアイ

【加奈子】用台本

ひまわりフェスタ会場。

柴田孝文（27）が畦道を歩く。

前にいる仙田加奈子（27）が手を振る。

12 tiger-Ey
e,004
加奈子

孝文くん、早く！ こっちこっち！」

11 tiger-Ey
e,001
孝文（N）

「久しぶりの大型連休。せっかくだから、どこか遠出でもしようと言
と、加奈子は意外なことに佐賀市の兵庫町を選んだ」

10 tiger-Ey
e,008
孝文（N）

「どうしても、ひょうたん島公園のひまわり畑で開催される、ひまわり
フェスタに来たかったらしい」

歩き続ける、孝文と加奈子。

13 tiger-Ey
e,004
加奈子

懐かしい。昔と全然変わってないね」

14 tiger-Ey
e,008
孝文

「……前にも来たこと、あったの？」

15 tiger-Ey
e,001
加奈子

「……やっぱり、覚えてないんだ」

16 tiger-Ey
e,008
孝文

「え？」

17 tiger-Ey
e,001
加奈子

「ううん。なんでもない。言ってなかったっけ？ 私、出身
はこの町なんだよ」

17 【孝文】

「そうなんだ？ だからか。佐賀市の兵庫町なんて、マニアックな場所をチヨイスするから、おかしいと思っただよ」

18 tiger-Ey
e.010 【加奈子】

「……どうせ、マニアックな町の生まれですよーだ」

19 【孝文】

「あ、ごめん。そういうことじゃなくて」

20 tiger-Ey
e.012 【加奈子】

「あははは。冗談だよ。孝文くんはこの生まれだっけ？」

21 【孝文】

「生まれは福岡だけど、親の転勤が多くてさ、これといった故郷ってないかな」

22 tiger-Ey
e.014 【加奈子】

「それって、辛くなかった？」

23 【孝文】

「かえって、助かったかな」

24 tiger-Ey
e.016 【加奈子】

「助かった？」

25 【孝文】

「ほら、俺ってさ、目のことがあるから、小さいころから、イジメられたり、壁を作られたりしてただよ」

26 【孝文】

「でも辛いなって思う頃には転校するから、楽だったってわけ」

27 tiger-Ey
e.019 【加奈子】

「……そうなんだ」

29 【孝文（N）】

「先天性遺伝子疾患、虹彩異色症。通称、オッドアイ。日本では一人に一人の確立で現れるらしい」

30 【孝文（N）】

「生まれつき、左右の目の色が違うというもので、別段、他に変わったところはない」

31

32 【孝文】

「最初はさ、なんでイジメられるのか分からなかったし、オッドアイだって知った後も、それでイジメられる理由が理解できなかったな」

33 tiger-EV
e.023 加奈子

「他の人と同じじゃないといけない。日本だと、まだまだそういう考えをする人が多いからね」

34 〔孝文〕

「子供だと特に、そういうとこ、敏感だからなあ」

35 tiger-EV
e.028 加奈子

「だから、いつも教室で一人だったんだ？」

36 〔孝文〕

「距離を取ってれば、イジメられることも少なくなるんだよ。未知のものには近づかない」

37 〔孝文〕

「そういう部分も人間にはあるみたいだしね。……まあ、子供だと、好奇心の方が勝る場合もあったけど」

38 tiger-EV
e.028 加奈子

「……」

39 〔孝文〕

「高校の時さ、格好いいって言って、近づいてきた奴がいたんだ。左右の目の色が違うなんて、まるで選ばれた人間みたいだった」

40 tiger-EV
e.030 加奈子

「……選ばれた人間？」

41 〔孝文〕

「二万人に一人っていうのもあったと思う。きっと、特殊な能力に目覚めるはずだって言って、つきまとわれたよ」

42 tiger-EV
e.032 加奈子

「変わった人だね……」

43 〔孝文〕

「そんなこと言われたの初めてだったからさ、何かうれしくなって、そいつとつるむようになったんだ。色々なアニメ見たり、変な能力を出す練習をしたり……」

44 〔孝文〕

「今考えてみれば、厨二病って奴かな。それはそれで、痛い思い出だけど、まあ、楽しかった」

45 tiger-EV
e.035 加奈子

「ふーん。今の孝文くんからは想像できないけど」

46 〔孝文〕

「転校して、そいつと会わなくなったら、ピタリとアニメとか見なくなっただけだね」

47 tiger-EV
e.037 加奈子

「他には、何か思い出のある場所ってないの？」

48 〔孝文〕

「ん？ ーん。そうだなあ。そいつのインパクトが強すぎて、他はあんまり覚えてないかな。あとは似たような感じだったし」

49 tiger:Ev
e_038 加奈子

「……そっか」

50 孝文

「どうかした？」

51 tiger:Ev
e_041 加奈子

「ううん。随分と寂しい青春時代だったんだなーって思っ
て」

52 孝文

「うっ！ 人が気にしてることを……」

53 tiger:Ev
e_043 加奈子

「うふふ。さっきのおかえしだよ」

54 孝文

「ふん。今が幸せだから、別にいいんだ」

55 tiger:Ev
e_045 加奈子

「え？」

56 孝文

「加奈子とこうして、一緒に過ごせてる。だから、過去が不幸だったと
しても、気にはならない、かな」

57 tiger:Ev
e_047 加奈子

「……それって、遠回しの、プロポーズ？」

58 孝文

「どうだろうね？」

59 tiger:Ev
e_049 加奈子

「帰りに、私の実家に寄ってく？」

60 孝文

「あー、いや。まだ、その心の準備はできてない……」

61 tiger:Ev
e_051 加奈子

「ふふっ。冗談だよ」

62

63

加奈子がピタリと立ち止まる。

64

つられて、孝文も止まる。

【孝文】

「……加奈子？」

【加奈子】

「実はね、この場所って、初恋の人との思い出の場所なんだ」

【孝文】

「……このタイミングで、他の男の話？」

【加奈子】

「……」

【孝文（N）】

「加奈子は微笑んだ後、不意にしやがみこんだ。その視線の先には、他のひまわりよりも一回り小さい花がある。……それは、ひまわりによく似ているが、違う花だった」

【加奈子】

「ルドベキア、タイガーアイ……」

【孝文】

「……あ、思い出した」

【加奈子】

「え？」

【孝文】

「小学校の頃さ、これと同じ悪戯をしたことがあるんだ」

【加奈子】

「悪戯？」

【孝文】

「ざつきも言ったけどさ、目の色が違ってただけでイジメられるってことが不思議だったんだ。ちよつと違ってただけで、どうしてこんな風に見えるだつて」

【加奈子】

「……」

【孝文】

「だからさ、学校でひまわりフェスタに見学に行くって聞いて、ある実験をすることにしたんだ」

81 〔孝文〕

「あいつら、人の目の色が違うことを馬鹿にしてたけど、たくさんの花ひまわりの花の中に、似た花があっても馬鹿にするのかって。それで、その飼育員をしている人に頼んでみたんだ」

82 〔孝文〕

「ルドベキアタイガーアイを植えていいかって」

83 〔孝文〕

「

84 〔加奈子〕
e.068

「なんて言われたの？」

85 〔孝文〕

「笑って、面白い、やってみようって言ってくれたよ。次の日には花を取り寄せてくれて、一緒に植えたんだ」

86 〔加奈子〕
e.070

「いい人だったんだね」

87 〔孝文〕

「その人と、どうなるか楽しみにしてたんだけど、結局、誰もルドベキアタイガーアイに気づかなかった」

88 〔加奈子〕
e.072

「……」

89 〔孝文〕

「飼育員の人は、まあ、そんなもんだよ、って笑ってたけど。でも、そのとき、俺は言ったんだ。花の世界はいいねって。違う花があっても、誰もイジメない」

90 〔加奈子〕
e.074

「ふふっ。孝文くんって、不機嫌そうな顔をしてた裏では、そんなロマンチックなこと考えてたんだ？」

91 〔孝文〕

「うっ、うるさいなあ。小学校の頃だったんだから、仕方ないって。そういう頃だったんだよ。……それから、毎日通ったなあ。ひまわりフェスタ」

92 〔加奈子〕
e.076

「……」

93 〔孝文〕

「なんか、ルドベキアタイガーアイが、花の世界の俺みたい思えてさ、枯れてないか、仲良くやってるか、見に来てたよ」

94 〔加奈子〕
e.078

「そのころに、一緒に来たかったな」

95 〔孝文〕

「……そうだね。あ、そうだ。今度、一緒に行こうよ。……どこだったかな？ あの場合」

96 〔加奈子〕
e.080

「……」

97 孝文】「……それにしても、加奈子は凄いな」

98 tiger-Ey e.082 加奈子】「え？」

99 孝文】「だってさ、一面ひまわりの中から、この一輪のルドベキアタイガーアイを見つけたんだから」

100 tiger-Ey e.084 加奈子】「う、うん。……」

101 孝文】「俺、何か嬉しいよ」

102 tiger-Ey e.086 加奈子】「嬉しい？」

103 孝文】「花の世界での俺を見つけてくれたこと。……そして、現実世界で、他の人間と違う、俺を受け入れてくれたこと」

104 tiger-Ey e.088 加奈子】「私もね、嬉しかったよ。私を選んでくれたこと」

105 孝文】「……加奈子」

106 tiger-Ey e.090 加奈子】「……孝文くん」

107 孝文】「……おっと、そろそろ暗くなってきたな。帰ろっか」

108 tiger-Ey e.092 加奈子】「……このタイミングで、それ？」

109 孝文】「ほは。さっきのお返し」

110 tiger-Ey e.094 加奈子】「それじゃ、花の世界の孝文くん。これからも頑張って、咲き続けてね」

111 孝文】「……その話題、引っ張らないでくれよ。結構、恥ずかしいんだからさ」

112 tiger-Ey e.096 加奈子】「ふふふ。行こっか」

【孝文（N）】

「もしかしたら、あの花は、俺と同じ理由で植えられたのかもしれない」

【孝文（N）】

「声に出して言うのは恥ずかしいから、心の中で願う。頑張って咲き続けるよ。そして、周りと違うからって気にするな」

孝文と加奈子が並んで歩いている。

【孝文】

「あ、加奈子、ごめん。ちょっとトイレ行ってくる」

【加奈子】

「じゃあ、先に車で待ってるね」

孝文が駆け足で進む。

【孝文】

「トイレ、トイレ……っと」

飼育員（45）を見つけて、駆け寄る。

【孝文】

「すみません。トイレってどこですか？」

【飼育員】 「ここを真っ直ぐ行って、突き当りを……あれ？ 孝文くんかい？」

【孝文】 「……え？」

【飼育員】 「いやあ、懐かしいな」

【孝文】 「えっと……」

【飼育員】 「ん？ 覚えてないかい？ よく、ここに来てただろ？」

【孝文】 「……」

【飼育員】 「ほら、一緒にルドベキアタイガーアイを植えただろ？ 覚えてないかい？」

【孝文】 「……この場所だったんだ」

【飼育員】 「結局、君が引越してから、あの花に気づくお客さんはいなかったよ……」

【孝文】 「あの……今もありますよね。ルドベキアタイガーアイ。もしかして、俺と同じような人がいたんですか？」

【飼育員】 「あれはね。君が引越してから、毎年植えたって人がいたんだよ」

【孝文】 「……毎年、ですか？」

【飼育員】 「なんでも、君がいる間に、話しかけることができなくて、後悔してたみたいなんだ」

【孝文】 「……」

「あの花を見てると、君を見ているような気持になるって言ってね。まあ、こちらとしても、特に問題はないから、続けさせてあげてたんだよ」

【孝文】 「……あの、その子の名前ってわかりますか？」

145 飼育員

加奈子。仙田加奈子ちゃんだ」

146 孝文

「！」

147

孝文が車のドアを開け、入って来る。

148

150 tiger-Ey
e.121

加奈子

「混んでたの？」

151 孝文

「あー、いや、ちょっと知り合いに会ってさ」

152 tiger-Ey
e.123

加奈子

「へー。そうなんだ？」

153 孝文

「なあ、加奈子」

154 tiger-Ey
e.125

加奈子

「ん？ なに？」

155 孝文

「その……ありがとう」

156 tiger-Ey
e.127

加奈子

「え？ どうしたの？ 急に」

157 孝文

「……なんとなく」

158 tiger-Ey
e.129

加奈子

「（笑って）何それ」

159

160 孝文（N）

「あの頃、俺はずっと一人だと思ってた。たった数人にイジメられてただけで、クラスの間人間全員から嫌われていた」

【孝文（N）】

「でも、それは違っていた。ちゃんとしたひまわりの中、このルドベキアタイガーアイを見てくれたのかもしれない。」

【孝文（N）】

「……俺はこれから、ひまわりの中のルドベキアタイガーアイを守ってくれていた人と、寄り添って生きていきたいと思う。」

終わり